

中津城跡(二の丸) 相原廃寺V

1992年度 中津地区遺跡群発掘調査概報(V)
中津市文化財調査報告 第12集

1993

中津市教育委員会

はじめに

大分県の北部、周防灘に面した中津市は、古くから豊前地域の産業・経済の中心として発展してまいりました。特に、近年では国道10号線中津バイパスをはじめとする、交通体系の整備が進み、工場・店舗・住宅などの民間開発をはじめ、公共施設の整備など都市機能は大きな変化をとげつつあります。さらに先般は「地方拠点都市」としての指定を受け、今後ますますの発展が期待されております。

一方、こうした開発行為の増加は埋蔵文化財の保護にも大きな影響を与え、ここ数年調査件数は年々増加の一途をたどっています。

こうした現状を踏まえ、中津市教育委員会では1988年度より国庫および県費の補助を受けて、市内に所在する重要遺跡を中心として確認調査を実施してまいりました。これは、各種開発行為に先行して重要遺跡の範囲、性格などを的確に把握し、必要な遺跡については事前に保護策を講じることを目的としたものです。

このような認識に立ち、今年度は中津城跡及び相原廃寺について調査を実施いたしました。これらの調査結果を今後の文化財保護行政に生かしつつ、より良いかたちでの文化財保護と開発との調整を図るよう、努力致したいと考えております。

おわりに、調査にあたりご協力をいただいた地元の方々、および、ご指導をいただいた調査指導委員の諸先生方、並びに県文化課をはじめ関係各位に対し、衷心より感謝の意を表する次第です。

1993年3月31日

中津市教育委員会

教育長 高椋忠隆



中津城本丸跡 天守台と復興天守

例　　言

- 一、本書は中津市教育委員会が1992年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概要である。
- 一、調査は1992年度国宝重要文化財等保存整備事業費、及び1992年度大分県文化財保存事業費の補助をうけて実施した。
- 一、調査にあたっては地権者である田原氏に多くなご協力をいただいた。
- 一、調査期間中、調査指導委員の諸先生方の他、下記の方々にご指導、ご助言をいただいた。

北野 隆(熊本大学工学部)高橋 章(福岡県教育委員会)

- 一、調査団の構成は次のとおりである。

調査主体 中津市教育委員会

調査責任者 武信 元(前任)

高椋 忠隆

調査指導委員 賀川 光夫 (別府大学教授)

小田富士雄 (福岡大学教授)

後藤 宗俊 (別府大学教授)

甲斐 忠彦 (大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長)

真野 和夫 (　　　　　〃　　　　　調査課長)

調査員 清水 宗昭 (大分県教育庁管理部文化課埋蔵文化財第一係長)

栗焼 恵児 (中津市教育委員会市民文化センター文化財係主任)

調査事務 土井 勝 (　　　　　〃　　　　　館長兼文化財係長)

田中布由彦 (　　　　　〃　　　　　主任)

富田 修司 (　　　　　〃　　　　　主事)

金丸 孝子 (　　　　　〃　　　　　臨時職員)

- 一、本書の編集、執筆は栗焼が担当した。また、遺物整理は中野温子、岩崎弘子、秋吉三和子(中津市歴史民俗資料館)が行った。現場作業は以下の皆さんによる協力による。

徳永賀子、黒川みゆき、黒川洋美、神崎文子、田原文子、中 和代、湯口ヒロ子、小倉真理、黒土勉

目　　次

第1章 地理と歴史的環境	(1)
第2章 中津城跡	(2)
第3章 相原廃寺	(7)
まとめ	(10)

第1章 地理と歴史的環境



図1 中津地方主要遺跡分布図

大分県の北部、周防灘に面する中津市は、人口67,000人余り、市域55.67㎢を有する県北の中核都市である。

本地域の地形は、沖積平野である沖代平野と、洪積台地である通称下毛原台地によって代表される。遺跡の多くは下毛原台地と、山国川沿に発達する河岸段丘上に立地し、沖代平野には広大な条里遺構が展開する。

旧石器時代の遺跡は近年断片的ではあるが散見されつつある。その立地は洪積台地の先端部に多く認められ、後期旧石器時代に属する。

縄文時代の遺跡の多くもこうした洪積台地に立地する。これは縄文時代の海進状況を示していると考えられ、唯一、高畠遺跡のみが海岸部に近い河岸段丘上に立地する。

弥生時代と古墳時代の遺跡はほぼ分布域を同じくして立地する。多くは洪積台地には分布し、一部山国川の河岸段丘上や、八面山(標高659m)から延びる高位の丘陵上に分布する。

七世紀以降、沖代平野には条里制がしかれ、現在に至るまで本地域の経済基盤の基幹をなす。

第2章 中津城跡

1. 調査に至る経緯

1992年2月、建設省九州地方建設局より中津市1257番地の16外の土地における埋蔵文化財調査の有無について、中津市教育委員会に照会がなされた。これに対し教育委員会では、当該地区が中津城二の丸跡であることと、絵図によれば北門、櫓ノ木門、武家屋敷、掘等が存在したことが明記されているなど、中津城の城郭の中でも重要な地区であるとの認識を示し、文化財保護法に規定される諸手続きが必要な旨回答を行った。その結果、九州地方建設局より確認調査の実施について協議がなされ、中津市教育委員会が調査主体となり遺構の確認を目的として調査を行うこととした。

2. 中津城の沿革

南北朝の頃、中津城は丸山城と呼ばれ、中津江太郎なる人物の居城であったと云われている。

その後、九州の平定を行った豊臣秀吉は、農前六郡の領主として黒田孝高を播州攝磨から入国させた（1587〔天正15〕）。孝高は大塚山に居館を構え、間もなく中津江太郎の居城であった丸山城の補修に着手した（1588〔天正16〕）。ここに、本格的な中津城の造営が開始されたのであるが、しかし、孝高による中津城造営はその多くを周辺の城（広津城、大丸城等）からの廃材を転用したものであったとされ、本格的な中津城の整備は次の細川忠興の入国を待たねばならなかった。

1600年〔慶長5〕、豊前と豊後の一部三〇万石の領主として細川忠興が入国した。忠興は最初小倉城の整備を進め、それが一段落した後、中津城の整備に着手したようである。その後幕府の「一国一城令」（1615〔元和1〕）により、一時中津城の普請は中断されるが、幕府の許可を得て忠興の隠居城としてその完成を見た。その規模は本丸、二の丸、三の丸を中心とし、八門（椎ノ木、水、鉄、黒、櫓ノ木、大手、北の各門）、二二の櫓を内郭として、さらに經川を利用して外堀を整備し、西に広津口・小倉口、南に金谷口・島田口、東に駒瀬口・大塚口を設け外郭とし、これをもって基本的な構張りとした。本丸5005坪、二の丸5444坪、三の丸11357坪、内堀1481坪で、これらを合計した内郭の総面積は23287坪であった。

さて、こうして完成された中津城の特徴は山国川の河口の扇状地を利用し、城の背後に山国川、前面に周防灘を望む、自然の要害を取り込んだことと言える。したがって、所謂“海城”と呼ばれる城郭の形態を有し、その地形的特徴から別名“扇城”と呼ばれていた。

1632年〔寛永9〕、播州龍野から小笠原長次が八万石の城主として入部した。『豊前誌』によれば「中津ノ市街ノ全ク成就セシハ寛永ヨリ寛文」とされ、正に小笠原時代に城下町の整備が完成したと言える。中でも特筆されるのは、1652年〔承応1〕町奉行沢渡志摩に命じて作らせた石垣による上水道で、その形態は発掘調査により確認されている。こうしてこの頃までに城下十四町は完成されたと考えられ、黒田孝高による築城開始より64年を経て中津の城下町はその原型が完成した。

その後1717年〔享保2〕、丹後宮津より奥平昌成が一〇万石の城主として入国し、1871年〔明治4〕廃城となった。



中津城下町縦張図(19世紀後半)

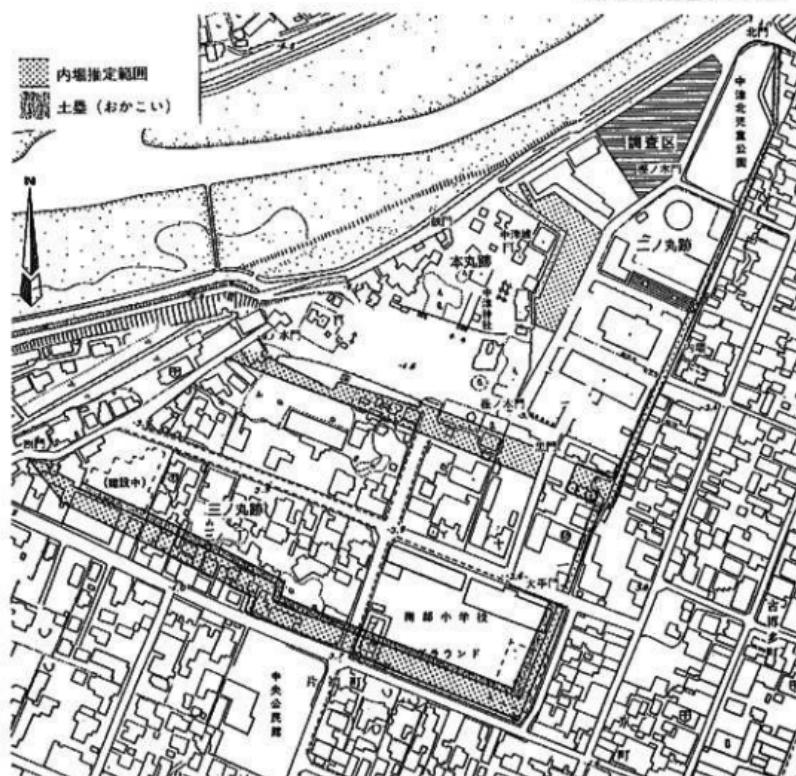


図2 中津城下町現況図

3. 調査の概要

調査は1993年2月1日から3月26日まで実施した。今回の調査は、中津城跡の地下遺構がどの程度遺存しているかを確認することに主眼をおいた。それは1914年〔大正3〕に下毛郡立高等女学校(現・中津北高校)が開設され、1959年〔昭和34〕に現校舎に移転するまで存在したことと、その後最近までは遊戯地として利用されて来た経緯を鑑み、地下遺構が全て破壊されている可能性を考慮したことによる。調査にあたっては幕末に描かれた絵図を参考にし、北門跡、櫓ノ木門跡及びこれに接する掘の確認を目的とし調査区を設定した。

1) 遺構

調査の結果、石垣遺構1カ所及び廻跡と思われる溝状遺構、さらに井戸跡2基(時期不明)を確認した。

石垣遺構は長径60~40cm程度の梢円形の河原石を用い、東南から西北方向に直線的に認められ途中わずかにクランクして調査区外へ延びている。全容を確認するには至らなかったが、状況から判断すると、さらに両サイドに遺構が存在するものと思われる。この石垣遺構の地下構造について、サブトレントによる確認を試みたところ、これより下に石垣は存在せず約30cm程度掘込地業を行った後、根固めに拳大的河原石を咬ませて石垣を安定させている状況が確認できた。(図3)

廻と思われる溝状遺構は、この石垣遺構の北側約7mの地点で確認され幅約14m、最深部で深さ約1.8mを測る。埋土の堆積状況は図3に示すとおりで、I~IV層は大正時代以降の整地層と考えられる。V・VI層は下毛高等女学校開設時の用地造成にかかるものと思われ、この時点で堀は完全に埋め立てられたと考えられる。VII層は自然堆積による砂層で、成因は不明である。VIII・IX・X層は所謂“焼ガラ”の堆積層で、石炭等の燃え滓を一括して大量に投棄したと考えられこの下層に堀の最終底面と考えられる泥土層(Ⅺ層)が認められる。

2) 遺物

遺物は、後世の整地層及び溝状遺構から出土し、その多くは近世及び近・現代の瓦片である。陶磁器類は主に溝状遺構Ⅹ層面から出土し、19世纪代のものが中心であるが、整地層から出土したものの中には龍泉窯系の青磁なども見られ、往時の中津城を偲ばせている。溝状遺構Ⅹ層の陶磁器類を見ると、最も新しいもので明治30年頃のものが存在し、少なくともこの頃までは堀が存在していたことが分かる。

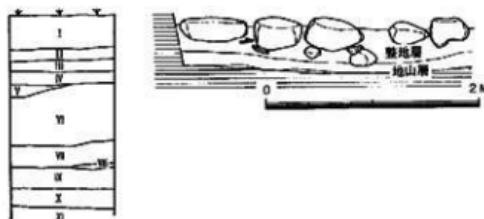
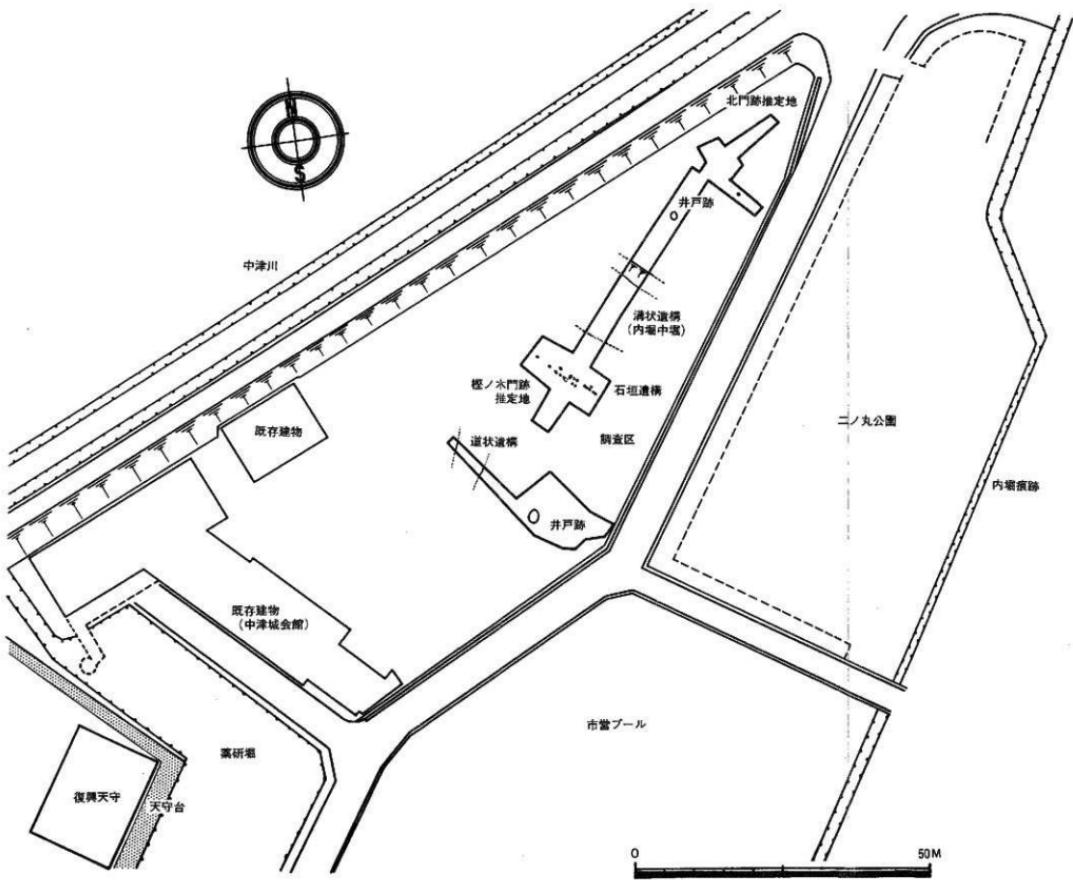


図3 溝状遺構上層模式図 及び 石垣遺構土層断面図



第3章 相原廃寺

1. これまでの調査の成果

1988年度より行ってきた相原廃寺の調査も、今年度で5年次を数える。その間、唯一相原廃寺の痕跡を示すB地区建物基壇を中心とし、主に北側水川地帯を対象として伽藍配置の解明を目的とした調査を行って来た。しかし、その成果は決して我々の満足するものではなく、結果として相原廃寺のプライマリーな遺構はB地区の建物基壇だけであるという、従来の定説を肯定するものとなった。これまでの調査の成果をまとめると以下のようになる。

A地区(貴船神社)については、境内に4個の礎石が配置された状態で残されていることと、境内石垣面にも6個の礎石が転用されていることなどから、B地区建物基壇と密接な関係があるのでないかとの認識で確認調査を行った。しかし、結果的には自然地形を利用して境内を造成したことが判明したに過ぎず、逆説的に相原廃寺の寺域北限を示すこととなった。

B地区(建物基壇周辺)では、基壇がどのような建物に用いられていたかを特定することを目的として調査を進めてきた。その結果判明したことは、版築の状況等から基壇の南北規模は13m(約43尺)程度と推定でき、掘込地業を全く行わず、基盤である岩層から直接版築を行っていること。さらに基壇の推定高は2m以上になると考えられ、現存礎石の心々が1.8m(6尺)であることなどから、これが塔跡である可能性を指摘できた。しかし、東西の拡がりについてはさまざまな材料は得たものの確定的なものとはならなかった。

C地区(水田地帯)は最も重要なポイントとなる地区で、従来は講堂跡推定地とされていた部分である。もともと基壇跡との最大比高差が3.5mもあり、かなりの地下げが行われていると考えられており、調査の主眼は伽藍を区画するであろう溝状遺構など、地下遺構の検出に置いた。その結果、C地区からは南北もしくは東西に走る多くの溝状遺構を検出し、調査区中央付近を中心に大量の古瓦が出土した。そして中には主要伽藍を区画しそうな溝状遺構(SD26)や、大規模な敷地層(SD36周辺)なども確認できたが、地下遺構として確定できるには至らなかった。その原因は出土した大量の古瓦に混じって、若干ではあるが近世の陶磁器が出土するためで、このことからすれば近世のある時期に、我々の想像を超える規模で地下げが行われたと認めざるを得ない。したがって、C地区についてはここに大規模な主要建物が存在したことは間違いないとしても、既にその痕跡は削平されたと解釈すべきであろう。

以上の調査結果を踏まえ、今年度はB地区建物基壇の西限の確定を目的とし、前年度第14トレンチで認められた基盤層の落ちが、南側へ延びるか否かの確認を行うこととした。

2. 調査の概要

調査は第14トレンチの南側延長線上に第17トレンチを、また建物基壇西側に第18トレンチを設定して行ったが、第18トレンチでは基盤層を検出したのみで、特に遺構は存在しなかった。一方第17トレンチでは南北方向に延びる浅い落ちが認められ、これが屈曲し第11トレンチで検出されているSD02へつながる状況が見られた。しかし、第14トレンチで見られた落ちの延長線上からは約2m程西側にズレを見せることから、両者の間に直接の相互関係は想定しにくいと思われた。むしろSD02のつながりを重視すべきであるが、現況では住宅があり調査は不可能である。

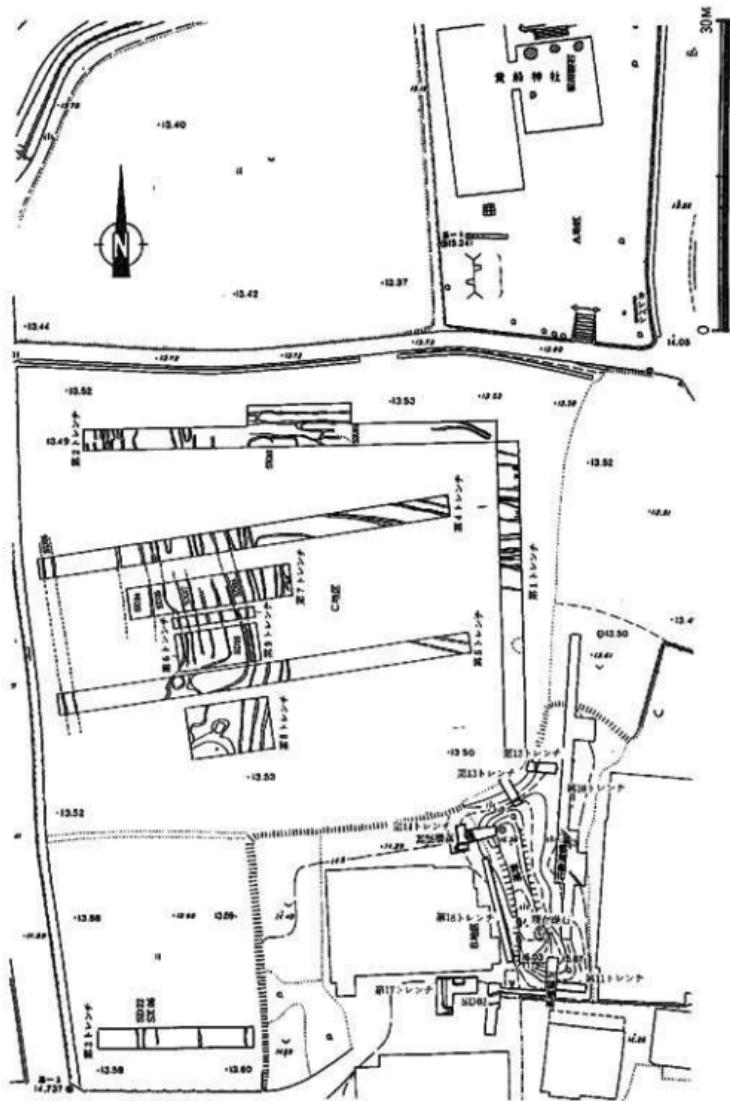


図5 相原廃寺トレンチ 及び 遺構配置図 (S=1/600)

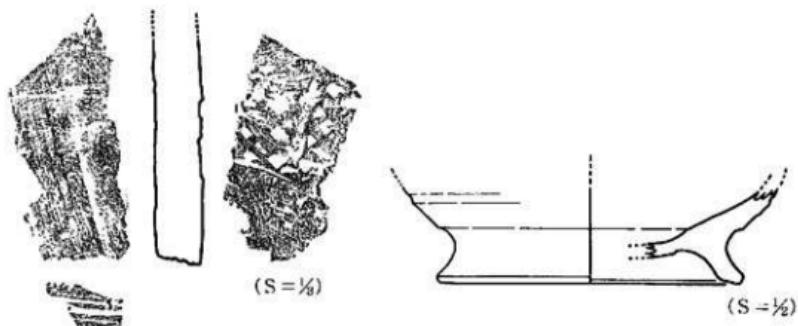


図6 第17トレンチ出土、軒平瓦及び須恵器実測図

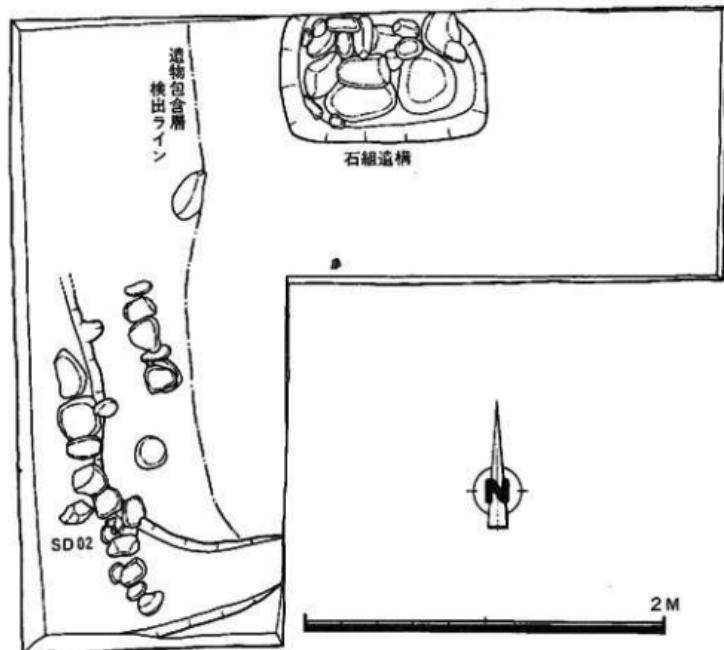


図7 第17トレンチ平面図

ま と め

1. 中津城跡

幕末に描かれたと考えられる数種類の絵図によれば、今回調査した中津城二の丸跡には山国川沿いに中津城内郭を巡る石垣、御花畠、櫓ノ木門、北門、内堀中堀及びこれに伴う石垣、上土屋敷（木村源八）、内馬場などが描かれている。この他、用途不明の構造物も若干あるが、絵図によっては確定的ではなく、十分な検証はできない。こうした基礎資料を元に、今回の調査で判明した事実について考察してみたい。

まず、山国川沿いに内郭を巡る石垣については、すでに河川改修により失われており、その痕跡すら何處なかった。前述のとおり、1914年【大正3】には下毛高等女学校が開設され、このころ石垣の大部分は取り壊されたと考えられている。1950年代の写真によれば山国川沿いに石垣は存在せず、僅かに北門付近に半壊した石垣が残されているに過ぎない。その後の河川改修によりさらに破壊が進み、僅かに残されていた北門の石垣も取り壊されたが、1987年の河川改修に伴い模擬石垣による護岸と、コンクリート製の武者彫が造られ一応の修景がなされた。

御花畠については、その構造が不明であり、今回の調査では十分に検証することはできなかった。これは一つに、調査終盤で近世の生活面が当初の予想より、さらに30cm程度下にあることが判明したことによる。したがって、時間的にこの面までの調査ができず、詳細については本調査による精査を期待したい。なお、内馬場と上土屋敷については、調査区外と考えられた。

次に、石垣遺構と溝状遺構について考察してみたい。今回の調査で確認された石垣遺構と溝状遺構が、位置的に櫓ノ木門跡周辺であることは、絵図で認められる位置関係からしても明らかである。特に内堀中堀については、ほぼ溝状遺構がそのものであると断定して差し支えないと考えられる。問題は、石垣遺構がはたして櫓ノ木門跡に該当するかどうかであろう。結論から言えばこの石垣遺構は櫓ノ木門跡の敷石もしくは、基底部の石垣、または内堀中堀に付随する石垣であることは間違いないが、今後の調査によって周辺部の状況が明らかになれば、このいずれかか特定できるであろう。また、本来の近世生活面までの精査は部分的にしか行っておらず、全体の精査を行った時点で、新たな遺構の存在も予想でき、こうした点も考慮して全体の本調査はぜひ必要となってくる。

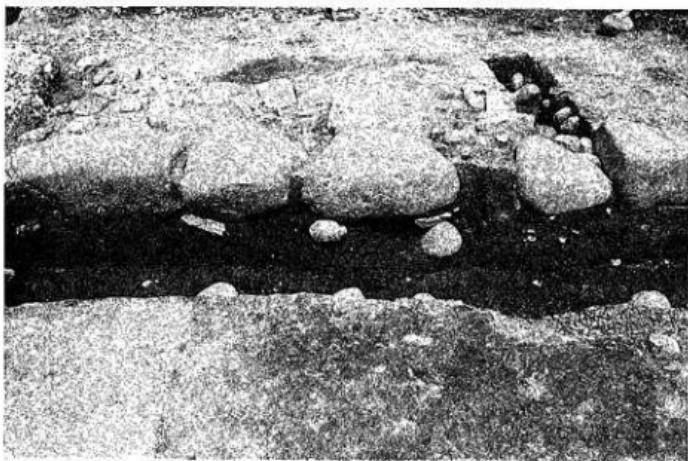
2. 相原庵寺

これまでの調査の成果については前述のとおりである。これを受けて今年度調査は、建物基壇西限の確認を目的としたが、結果として第11トレンチで確認されていたSD02に隣接すると思われる溝状遺構の一部を確認したことにとどまった。これが建物基壇南限を示す乱石積基壇端とどのように関連し、また建物基壇の規模を決定するうえで、どの程度有効な資料となり得るか現段階では確定できない。しかし、第14トレンチで認められた基壇層の落ちとの間にズレがあることや、現存基壇との位置的関係などを見た場合、積極的にSD02を建物基壇に伴う施設として論じることはできない。

以上の調査結果を踏まえ、相原庵寺建物基壇については、周辺の宅地化に伴う削平が著しく、その規模及び性格については、確定するに至らないとの結論を出さざるを得ない。



1) 二ノ丸跡全景（復興天守より）



2) 石垣遺構検出状況及び土層



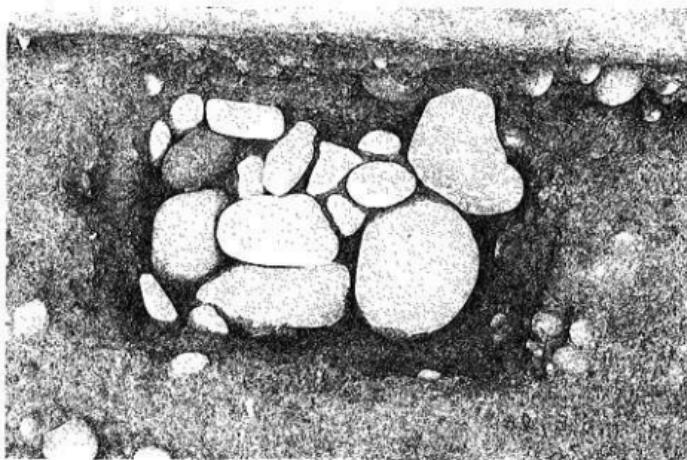
1) 潛伏櫓全景（西より）



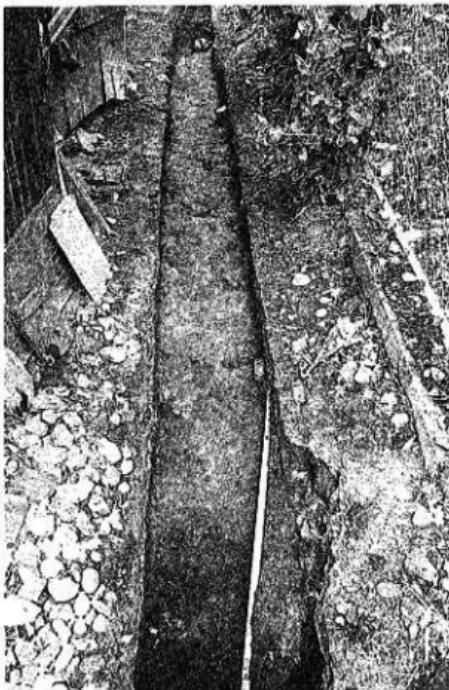
2) 潜伏櫓土層及び遺物出土状況（北より）



1) 第17トレンチ完掘状況（南より）



2) 第17トレンチ石組造構



1) 第18トレンチ完掘状況（南より）

2) 第17トレンチ
須恵器出土状況



中津城跡(二の丸)

相原庵寺 V

中津市文化財調査報告 第12集

1993年3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 川原田印刷社